

音で旅する意識空間

語り手 響奏の吟遊詩人 主宰 鍋島久美子

精妙な音は人の意識の中心をひらく

♪耳をひらくとは

——響奏の吟遊詩人では「耳をひらく」ことをテーマにしているそうですね。具体的にいうと、それはどういうことですか？

言葉で説明するのは難しいのですが、耳をひらくということとは、一言でいえばひたすら「聴くこと」につきます。私たちの耳は普段、全体を聴いているつもりでも、メロディラインや特定のリズムを「ヨコ」に追ってしまいやすいですね。でも、時間とともに流れ変化していく音を一瞬一瞬「タテ」に切って、その瞬間の響きの立体を自分の耳だけで聴き取る、ということをやりに続けていくのです。

一瞬過去でもない、一瞬未来でもない、つまり、常に「今」という瞬間に耳を集中し続けていることで、耳は少しずつ開き始めます。もともと人の耳というのはとても精巧にできていますから、使えば使うほど本来の精妙な音を聴き取る能力は開花していきます。

和音を聴きながらそのうちの一つの音を歌う事を「分離唱」(故・佐々木基之先生によつて提唱)といいますが、音は三つ以上合わさつたときに初めて求心力が生まれます。二本足の椅子やテーブルが存在しないように、音にも最低三つの支点が必要なかもしれません。ですから三つ以上の音を聴きながら自分の音を出していくというプロセスは、自分の意識の中心を探る旅でもあるのです。

——すると聴くだけでなく、歌う事もするのですね？

ええ、自分の声帯やピアノを使って、実際に音(声)を出していきます。

ただそれは、どう歌うか、どう弾くかという技術ではなくて、あくまで「聴こえる音」の自然な発露として音が出る、ということなのです。つまりその人に聴こえている音が、その人の中心を通つて出てる。それは歌おう、弾こうとして意図的に出す音とはまったく質が違います。

声を出すときにはいつも、「後ろへ出して」と言っています。後ろへ出す音は、その人の深い部分からやってきます。深いけれども、軽くてクリアで、生きる喜びが息づいていて。感情ゆたかだけど、そこに埋没しない。その人の宇宙の音、存在の音だな、と感じる音なのです。ひらかれた音というのでしょうか。

なく上へ上へと上昇出来る地点なのです、そこは正確なニュートラルポイントで、少しでもずれば、そこに疑似空間を作つてしまします。思い込み空間とでもいうのでしょうか。

正しく中心にアンテナが立つと、精妙でパワーのある上昇気流が起こります。はじめはつむじ風のようなものが立ち、少しずつ成長して、やがて竜巻のように天と地の両方にエネルギーを抜きながら大きな渦を巻き起こすようになるのです。そのためには、狂いの無いチェック機能がなければいけません。

♪ 音の響きは確かなセンサー

——それは自分で自分を確認できるということでしょうか？

そうですね。自分が全ての感覚・知覚をどう使っているかに気づき、この世界を今、どんなふうと感じ、体験しているかをチェックできる感性といえбайいでしょうか。自分を自分でチェックするなんて、主観的であてにならないと思うかもしれませんが、音の響きは確かなセンサーになるのです。なにか一つの気づきは、意識の奥と呼応しながら、より深い気づきの風を起こしていきます。

どこかあいまいな感情だったり、平面的な硬さのある思考だったりすると、そういう意識から出る音は、開かれていないその壁に突き当り、壁を通過しない音になってしまうのです。

そうやってひとつひとつ検証していくことで、人は自分の思い込みを打破しながら、より明るい、心の底からわくわくする空間へといざなわれて行きます。それはある意味では冷徹なプロセスとも言えますが、自分を傍観者にすることは全く違います。壁を通過し、空間を旅し続ける音は、幸せな強いパワーに満ちています。

耳をひらくとは、一瞬一瞬の自分のセンサーを動かせ、意識の全体と照らし合わせてよりクリアな喜びを体験し続けることなのです。

——そのセンサーには、なにかチェックポイントのようなモノがありますか？

ナビの原理は簡単です。「風」を感じるのです。開く方向に吹く風は、精妙です。立ち上る一筋のお香の煙がかすかな風にフツと揺らぐように私たちの奥の感覚は微細な揺らぎに反応する力があります。その微細な風は、私たちを次々と新しい空間に連れて行つてくれます。

精妙なひとすじの音の響きを感じ続けるのも、それを信頼するのも、また実際の音に出すのも、そして、そのエネルギーで日常を生

——そうやって耳がひらいていくことが、意識とどう関係するのでしょうか？

音は形がなく、言葉や概念を通りません。音は瞬間で、意識の中心までストンと落ちます。人の意識の中心へ入つた音は、知らずに意識を開かせてしまうのです。

耳が開いてくると、聴覚だけではなく、その人の感覚体験全体が変わり始めます。現実には、具体的な出来事を体験して気づく、というような意識的なプロセスがなくても、人の意識の中心に落ちた音の心地よさ・響きは、無条件に全ての感覚を変化させていくのです。

幸せの感覚、喜びの感覚も、そして悲しみや辛さの感覚も、その後ろにひらかれている無限の可能性を感じていれば、人は意識しなくても光の方向にハンドルを切つていくようになるのです。

同じ問題にぶつかつても、闇を背負つていく道と、闇の意味も知りつつ光の方向へ進む道とは全くパワーが違うでしょう？耳をひらくというのは、言ってみれば自分の感覚を全開にして、一番明るい光にチューニングできるようになる為の、練習なのです。ですから、続けていくうちに、その人特有の反応パターンとか、過去の経験から生じている感覚の曇り、ひずみなどが少しずつ取れて、全ての感覚のレンズがよりバランスよく透明なものになっていきます。

♪ 感覚を全開にすると、「知らない空間」への旅がはじまる

——すると意識の中心から出る音といっても、最初から透明とは限らない？

そうですね・・・音にはそれを発する人の意識のすべてが乗つてしまいます。お料理でも「お母さんらしい味」とか「メリーさんらしいシチューだね」というように、あらゆるものに人の意識が乗るでしょう。しかも音の性質はきわめてシンプルで

きるのも、全てに「意識の筋力」がいります。新しい空間が開かれる度、響きの音色やインパクトは変化し、よりいつそう精妙でダイナミックになっていきます。限りがないですね。それは「幸せを感じ続ける力」を養うレッスンといつてもいいかもしれません。

音によつて意識空間の旅が続けると、ついにその人の奥のエネルギーが動き出す時がやって来ます。響きの質が違うものになります。意識の奥行き空間を統合した人の響きは、人々の奥にもしつかりと届く。どういったらいいのか、現象の背後にある奥行きが、合わせ鏡のように映しこまれ、人を開いてしまうのですね。思い込みではなく、実際のエネルギーが動き始めます。そこには中途半端な曖昧さがなく、はつきりとしたその人の宇宙が生き生きと現れ、動き、その宇宙空間がその人を運んでいくようになります。

♪ 新たなオクターブの時代

——すごいですね。音というのは、人間の意識とそれほど密接に関わっている・・・

そうなんです。音はまさしくエネルギーそのもので、意識空間の反映なのです。私も自分で体験しながら少しずつ理解しています・・・奥は本当に深いです。

毎回レッスンをする度に思うのですが、本当に不思議なくらい、みなさん一人一人違います。開くのは本当にその人の宇宙なんだな、と感じますね。人は誰でも日々、何らかの空間を持って生きています。でも、その人の意識空間の中心に光の柱が立ち、動き、いきいきとした宇宙が育つていくのを見ると、本当にすばらしく感動します。人の状態は千差万別です。光の柱を立てる必要のある人もいれば、柱は立つ方向にはあるけれど、その生かし方や動かし方、つまり空間を築しむことを学ぶという人もいる。人は長い旅をしてここまで来て、これからもまた旅をしていきます。今私たちは進化の節目にいてるのではないのでしょうか。

音のハーモニーは、私たちの内側に新しい未来をひらいてくれると思います。ルドルフ・シュタイナーが今から約一世紀ほど前に「人類はまだオクターブを見いだしていない。だが将来、人はオクターブ感覚を通して高まり、新たな自我を発見するだろう」という意味のことを言っています。そして、大事なはその言葉ではなく、そこで感じられるものだ、と。

すから、その人の意識が硬くなっているところ、意識全体をまわすのに引つかかっている部分もはつきり表れやすいのです。ましてハーモニーは響き合いですから、共鳴作用の性質上、人の意識の奥に大きな影響を与えます。たとえば、もし発信者にゆがみがあれば、聴く人はそのゆがみも一緒に受け取るようになってしまいます。

——それは感情ブロックのようなものですか。

感情のブロックはだれにでもあります。感情がある方向に縛られているとしたら、確かに苦しいですね。でも、その苦しきから人は学ぶのですから、それは大切な試金石なのです。ところが、ありのままの自分を見たくない為に、苦しい部分を覆い隠そうとすると、問題の質がちよつと違つてきます。自我が肥大化して、表面の意識と深い意識とを両方ひつくるめた、大きな「全体としての自分」を感じられなくなり、エネルギーがまわらなくなつてしまう。

自分ではいいと思つていても、意識の焦点がブレて絞り込みが出来なくなると、少しずつエネルギーの空洞化が進行し、虫に食われた大木のように、ある日突然倒れてしまうかもしれません。その経験を、メッセージとして学ぶという方法もありますが、「私」という個の意識を満遍なく回す為には、無意識の中にあるものを微細にチェックし、意識化していく必要があるでしょう。そこで本来の全体的性を取り戻して初めて、「楽しく生きる！」という素地ができるのではないかと思います。

——ただハーモニーを楽しめばいい、という訳ではないのですか。

もちろん楽しいに越したことはありません。究極的には楽しむ為にやっているのですから。(笑)でも、楽しければ良いというものではなく、ここが妙味というのか・・・

自分を透明化していく作業は、はつきりいつて、結構しんどいものです。感覚の癒着があるとき、つまり意識が透明に向かつていないときには、発する音も思い込みの強い音になります。

自分の感覚を全開にして聴きつづけると、「知らない空間」への旅が始まります。表面の意識を超えて、自分の知らない空間へ向かう。そこはその人のすべてを含む空間で、まさに「その人の宇宙」なのです。

ふだん知っている自分の空間から、より精妙な、知らない空間へ旅するときには、正しい「羅針盤」が必要です。漏斗(「じょうこ」又は「ろうと」)つてありますよね。漏斗が逆さになったような形を想像して欲しいのですが、そのひとの意識空間の中心だけが限り

——シュタイナーの予言したその時代が、今現実に到来しているのでしょうか？

ええ、音の響きが導くところは、私たちの全感覚がひらかれていく道をはつきりと示しています。あらゆる感覚が、フラクタルで、精妙で、透明になり続けていく、という・・・

だれでも自分の器に合ったエネルギーを動かせばいいのですら、とてもシンプルです。自分を萎縮させるのではなく、誇大妄想を抱くのもなく、目先のプラスやサクセス・ストーリーにとらわれることもなく、大切なのは、一人ひとりの魂の課題がしつかりと地に足を着けて果たされていくことではないでしょうか。ちいさな望みをもつべきだ、というのではありません。人の心の、ぶれない空間の動きが広がつていけば、おのずと魂が共鳴しあい、時空を超えて共振作用と増幅作用を起こし、一人では到底出来ないような事柄まで動かす可能性があるのです。

その人の魂まるごとのエネルギーが動いてしまうことは、じつにパワフルに愛を生きていることになるでしょう。実際に愛のエネルギーがどのように自分の内側にあり、それがどう事実を動かし、広がつていくか、その形は一人ひとり全く違います。エネルギーは法則なので、正直で正確です。とても神聖で、とても普通です。意図的ではなく、何一つ特別ではなく、そして、人の奥をグーッと深く動かすのです。

自分の光の柱がゆるぎないエネルギーとなり、それを立たせ続ける道は、決してたやすいものではありません。でも楽しみなことに、生きる現実の道がそのプロセスを実証してくれるのです。

私たちはいつたいいここで、何を選び、学び、遊ぶのでしょうか。

(ナチュラル・スピリット社 2005)

Spring vol.15/StarPeople of Earth /インタビュー記事より

企画・取材 津賀由起子 文・構成 秋田幸子)

© ナチュラルスピリット社 響奏の吟遊詩人 鍋島久美子

禁無断電子化・転載・転送・頒布

響奏の吟遊詩人 <http://wing-of-wind.com>

